ホロ島戦記（『敗残の記』）の著者
藤岡明義さんの残された資料（２）

松岡勲

はじめに

本誌三七号で「ホロ島戦記（『敗残の記』）の著者藤岡明義さんの残された資料」を書きましたが、その藤岡明義さんの息子さんの誠さんとお会いすることができました。そのことから始め、「藤岡明義さんの残された資料」掲載後も誠さんからお父様の残された貴重な資料が送られてきましたので、その資料について書きます。

藤岡誠さんとの出会い

今年の四月二三～二四日に埼玉大学で開かれた戦争社会学研究会に参加し、「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝」（京都市の場合）について個人報告をしました。帰途、東京でフィリピン（ホロ島）戦の生還者藤岡明義さんの息子さんの誠さんとお会いすることができました。一年半前から連絡をいただき、一度会おうということになっていましたが、今回やっと実現できました。（写真でしか存じ上げないが）お父様と容姿がよく似ておられ、すぐ誠さんと分かりました。彼と私は同世代でした。

誠さんのお父さんの思い出話で印象に残ったことは、彼が小学生の頃、お父さんとアメリカ軍とホロ島の原住民モロ族との争闘を描いたゲイリー・クーパー主演の「暁の討伐隊」（ヘンリー・ハザウェイ監督、製作が一九三九年、日本公開は一九五一年一一月）を見に連れて行かれていたことです。勿論映画はアメリカの植民地主義的視線で作られているのですが（アメリカ版のユーチューブでは「西部劇」に分類されているのには驚きました）、ホロ島戦からの帰還者であるお父さんが息子さんに何を伝えたかったか、いろいろと想像させられました。

またもうひとつは、「中学生時代、父と感情的に疎遠となり、父が生きている間に戦争体験を聞けていないのが悔やまれます」と誠さんが話されたことが心に残りました。お父さんは退職後「不戦兵士の会」で語り部とし活躍しておられましたが、今でも会からカンパ要請があり、「年に二度ほどカンパしています」と誠さんがおっしゃっていました。このように誠さんとの楽しいひとときを持つことができました。

「『敗残の記』余録」「随想」

その後送られてきた資料に、藤岡明義さんが『敗残の記』出版（一九七九年単行本、一九九一文庫本刊行）後にまとめられた『敗残の記』余録」と「随想」がありました。ワープロ打ちで、製本も手作りで、執念と心のこもった冊子でした。誠さんからは「父が他界し、十年数年経ってまた書物（本誌第三七号のこと）で紹介されるとは感無量です。ありがとうございました。再度父親に関係する書棚を整理していましたら、二部ある書籍等がありまし

たので送付させていただきます。」とありました。

藤岡さんの『敗残の記』はその記述が極めて具体的で、正確と感じさせられるものですが、「日記は書いておりません。一兵卒に日記を書く時間的・精神的・物質的及び身分的余裕はありません。このメモを書いたのは米軍の収容所の中であります。紙は収容所の事務室にあったものです。」「応召入隊から任地（ホロ島）に至るまでの経過を、専ら記憶により、日を追って回想、日記形式で記録したものです。（中略）ホロ島到着後は、日時が混乱してしまって、日記形式は不能となりました。」とある。それにしてもすごい記憶力であり、死者に対する強いこだわりがないと書けない「戦記」であると思いました。「余録」「随想」を読んで、特に印象に残った文章に次のものがありました。

軍隊で日常茶飯事のビンタを藤岡さんはされなかったが、「私が殴ったことが一度ありました」。歩哨の交代時にまだ眠っていて起きなかった一等兵への（隊の生死に関わるための）その一度のビンタの話です。また、藤岡さんの中隊に「手相」をよく見る奥村という初年兵がいて、苛酷な戦争中の手相見と「死相」の話が続きます。手相見は「少なくともこの中では、あなたが一番（命が）短いですね。」と言いましたが、「それから一年も経たないうちに、私を除く全員が死んでしまった。奥村が一番先だった。」（以上、「余録」）

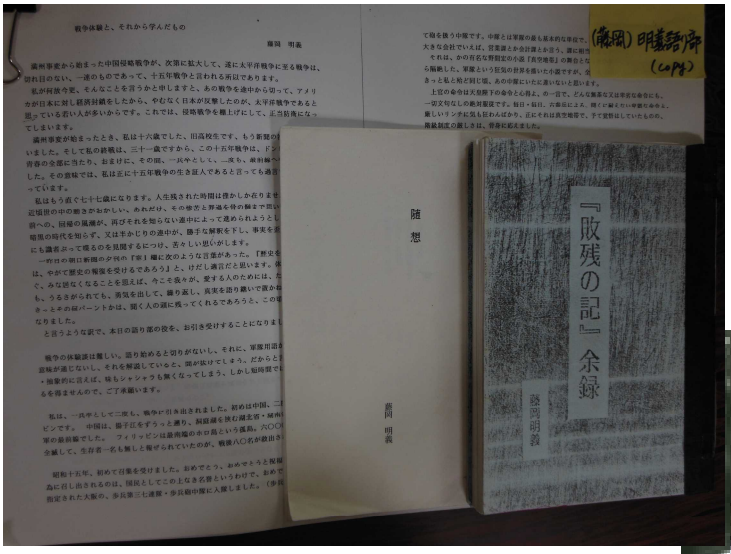
もうひとつは昭和初期のある日、読書会で友人A、B君の「第一次世界大戦」についての議論がなされました。「この空しい経験に懲りて人類は、二度とあのような喜劇を繰返すことはあるまい」（A）「喜劇！何ということを言うか、最大の悲劇だよ。しかし君の考えは甘い、人類は又やる、世界大戦は必ず再び起きるよ」（B）と。「それからいくばくも無くして、第二次世界大戦は勃発した。（中略）A君もB君もその戦争で死んだ。」これを含む短い四本の「随想」は、藤岡さんの「歴史は繰り返す」という危機感にあふれています。藤岡さんがもし生きておられたら集団的自衛権の容認、安保法制による軍事化・自衛隊の海外派兵へと動く日本の現在をどう見られるだろうかと思いました。

先に紹介した藤岡さんの残されたホロ島関係の資料は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科（フィリピン研究）の早瀬晋三研究室へ寄贈されたとのことです。よい引受先が見つかってよかったと思います。また、藤岡誠さんから送られて来たものに伊奈一夫著『ホロ島・モロ義勇隊／一信号兵の苦心創設譚』（これも藤岡さんの手作りのも）がありました。

『敗残の記』　経緯・書評・随想（副）

藤岡明義さんが集められ、整理された『敗残の記』　経緯・書評・随想（副）」がありました。これも藤岡誠さんから送ってもらったものです。ファイルで『敗残の記』　経緯・書評・随想（副）」となっていて、先に誠さんにお返しした資料のなかに『敗残の記』　経緯・書評・随想」があったので、両方で（正）（副）二冊だったのでしょう。もうひとつは、書評、感想の手紙のコピー、あるいは感想の手紙をひとつひとつ藤岡さんが書き写して一冊の本にしたものでした。藤岡さんがペンで丁寧に書き写した手紙類を読み、藤岡さんの『敗残の記』にこめられた思いが迫ってきました。余人にはできないことだと思いました。そのな

かには大岡昇平氏の『敗残の記』推薦の自筆原稿コピー、『敗残の記』に触発された読者が自らの戦争体験を綴った手紙類が藤岡さんの手で書き写されていました。そのなかには「従軍慰安婦問題」で私が講演を聞いたことのある吉見義明氏の感想もありました。『敗残の記』が出た当時に吉見氏が藤岡さんに連絡を取られていたことを知り、新鮮な感動を覚えました。「『敗残の記』　経緯・書評・随想（副）」にはホロ島でお兄さんを亡くされた名古屋の伊藤美代さんがホロ島戦没者慰霊の旅に出られた記事、京都でのホロ島戦没者供養の会に藤岡さんが招かれた記事（この時に伊藤さんと藤岡さんとの交流が始まったと伊藤さんから聞いたことがありました。）、藤岡さんが「不戦兵士の会」の語り部として活動された記事が丁寧に整理されていました。藤岡さんの戦後はどのようなものであったのか、不戦兵士の会でどのような活動をされていたのかを知りたいと思いました。



「（藤岡）明義語り部」（ファイル）等

語り部　藤岡明義さん

「（藤岡）明義語り部」

「（藤岡）明義語り部」（ファイル）を読みました。藤岡さんは二〇〇五年に八九歳で亡くなられるまで、不戦兵士の会に所属し、ご自身の戦争体験を各地で語り続けてこられました。毎回きっちりとワープロ打ちをした原稿が分厚い一冊のファイルに残されていて、読みながら感嘆しました。その語りは現在の問題と直結していて、きわめてアクチュアルな問題意識を持ったものでした。いくつか気がついた点を書いておきます。

一、『あの戦争、あの戦争』と人はよく言うが、一体その人はどの戦争のことを言っているのかということです。そしてそれが大多数はアメリカとの戦争を言っているのです。アメリカと戦って酷い目にあったことを言っているのです。（中略）あれは一五年間続いた中国に対する侵略戦争で、一般に一五年戦争と言われている戦争であります。アメリカやイギリスがその戦争に加わったのは、一五年のうちの最後の三、四年に過ぎないのです。」と藤岡さんはこの戦争を中国に対する侵略戦争（一五年戦争）と位置づけ、日本の加害者性と向き合って語っています。それは中国戦線と

フィリピン戦線との二度の戦争体験から見えたものです。

二、従軍慰安婦問題についても吉見明義氏への手紙で次の様に明確に書きます。「強制連行に関する軍の公文書などは出て来ないと思います。少なくとも軍はそんなものは出さないと思います。それは当時の軍の常習を知っている者は直ぐに理解できることですから。」この視点は「従軍慰安婦はなかった」とする最近の右派の攻撃にも通用すると思います。

三、藤岡さんの語りの射程が長く、現代的であることに感銘を受けました。残された語りの原稿を見ると住基ネット再接続に対する中野区への意見書、自衛隊のイラク派兵批判、自由主義史観批判等が展開されています。また藤岡さんは英語が堪能で（ホロ島での米軍への投降の際、英語が命を助けたことが出てきます）長文の英文原稿が残されています。一体何歳まで戦争体験を語られていたのかを確認しましたが、実に亡くなる前年の八八歳の時の国立歴史民族館での「戦争最前線、体験者に聞く」が最後でした。

このファイルを読み、藤岡さんの志に強い刺激を受けました。私も父の戦死に関わっての戦争体験にこだわって動いていきます。貴重な資料を提供していただいた藤岡誠さんに感謝します。

おわりに

藤岡誠さんとお会いした前後に小学校時代の同窓生M君とつながりが深まりました。彼のお父さんは朝鮮で亡くなっています。最初彼とおたがいの父の戦死について話をしたところ、「一九四五年、八月一五日に朝鮮の『ラクダ山』で亡くなったことしか分からない」とのことでした。戦争末期の混乱のためにそう情報処理されたのかと思いました。その後、「靖国神社は戦死者の情報を持っているから、問い合わせたらどうか」とすすめました。その結果、一九四五年八月九日のソ連参戦後のソ連軍の南下によって、「八月十五日」に朝鮮・満州・ソ連の国境地帯の「駱駝山」でなく亡くなったことが分かりました。ほんとうに八月一五日に亡くなっていたのでした。お父さんが亡くなったのは八月十五日の正午より前なのか、後なのか。なんということだと怒りを覚えました。彼は五人の兄姉の一番下で、お母さんは子どもたちを育てるため必死に戦後を生きてこられましたので、彼は今日までお父さんの戦没年月日、戦没場所、戦死の状況を知らないままだったのでした。その後も彼との交流が続いています。

（二〇一六年五月二五日）

藤岡誠さん